村落形態の分類とその領域構成

— 砺波散居村における居住特性の分析 その1 —

THE VARIATION OF VILLAGE FORMS AND THEIR UNIQUE
TERRITORIAL CONFIGURATION

A spatial analysis of dwelling system in the TONAMI plain Part 1

黒野 弘 靖*, 菊 地 成 朋**

Hiroyasu KURONO and Shigetomo KIKUCHI

In this study we attempt to explain villages of the Tonami Plain having a pattern of dispersed dwellings. Described in this paper as "dispersed villages" the pattern is not resulting from a cause and effect relationship, but rather as a generative system. We further attempt to make clear the spatial composition of the dispersed villages. First we divided all the villages into five categories, and looked at various areas of distribution and considered the corresponding location characteristics and development periods. Next we chose typical examples of each type, and analyzed their territorial configurations. As a result we realized that each type seemed to have a unique territorial configuration.

Key words : rural village, dwelling space, water way, land ownership, living field,
農村集落, 居住, 水路, 土地所有, 生活領域

1. はじめに

本研究は、日本における代表的な「散居」とされる砺波平野の村落を、住居・屋敷・村落の体系的な対応関係として分析することにより、その構成原理を明らかにしようとするものである。

砺波平野の散村については、歴史地理学等において多くの先行研究がある。とくに、庄川扇状地開拓の経緯と散居村の発展過程の解明はその主要な成果である¹⁾。ただ、当地区の特徴的な村落形態については、地形的・気候的要因や火災時の安全性、藩政上の要因など、その起源や原因を説明しようとするものが多い。しかし、後述するように、同じ扇状地のなかに散村と集村が共存する状況をみても、単なる気候や藩政を要因とする説明だけでは不十分なことは明らかである。本研究では、こうした既往研究の成果を援用しつつも、砺波平野の村落を因果関係ではなくシステムとして説明することを意図している。

まず、「散居」と総称される砺波平野の村々のなかに、実際には散居とは異なる村落形態も混在していることが

確認されたので、形態による村落の分類を行い、分布状況を把握した。さらに各タイプの立地特性と成立時期についても考察を加えた。

つぎに、これらの村落類型の典型例を選び、ケース・スタディを行った。そこではとくに、計画行為やそれに対する居住者の働きかけを含めた、居住の視点からそれぞれの特性を分析することを試みている。また、これらの分析結果を耕地整理前後で比較し、その影響についての考察を行った。

本編ではこのうち、村落形態の類型的考察を、領域構成に注目して行うものである。

なお、事例調査は1989年10月に庄川町<天正>、1990年10月に砺波市<東開発>と井口村<久保>、1991年7月に砺波市<増山>を対象として実施している。

2. 村落形態の分類と分布

2-1 村落形態の分類

砺波平野の村落は散居と総称されているが、実際に歩

* 新潟大学大学院自然科学研究科 助手・博士(工学)

** 九州大学工学部 助教授・工博

Research Assoc., Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu Univ., Dr. Eng.

いてみると、散居とは異なる形態の村落があることに気づく。こうした実感を確認するため、砺波平野のなかにどのような形態の村落が存在するのかを検討した。

具体的には、砺波平野の各市町村（高岡市、砺波市、小矢部市、および東砺波郡、西砺波郡の町村）が発行する 1/10000 都市計画図をもとに、一つ一つの小字の範囲に注目し、その中の住居の集合形態を確認した。

その結果、砺波平野という同一の地形・気候条件の中に、散居とは明らかに異なる形態の村落（例えば集村）が数多く見いだされた。さらに、散村や集村の中にも、いくつかの異なる形態が存在することがわかった。そこでまず、村落を形態から類型化した²⁾（図1、図2）。

最初に散村と集村とに分けた。これは、屋敷と屋敷が耕地によって隔てられているものを「散村」とし、直接屋敷同士が接するものを「集村」としている。

散村についてはさらに2つに分類した。①屋敷が隣村の境界に至るまで均等に分布しているもの。これを「境界不明確な散村」と呼ぶことにする。これは村落のなかを歩いても、その境界がわかりにくいことによる。いわゆる「砺波の散居」という特徴的な景観を構成する主要な村落群である。②隣村との境界付近に屋敷がない地帯がひろがるもの。これを「境界明確な散村」と呼ぶ。隣村とは、川や斜面や水田によって隔てられている。

一方、集村についてはさらに3つに分類した。③屋敷同士が前後左右に接する形でひとまとまりになっているもの。これを「塊状村」と呼ぶことにする。④屋敷が1列に並び、その列が数層に重なって集落が構成されるもの。「列状村」と呼ぶ。屋敷の各列は耕地によりわずかながら隔てられており、道路は各列に1つずつ接している。⑤道路に沿って両側に屋敷が並ぶもの。「街路村」と呼ぶ。これは一般的な街路村³⁾と同じ形態である。

2-2 各タイプの平野内の分布

このような5つの形態の分類に従って、砺波平野全域（平野中央部から南側の山麓部に至るまでの12市町村にわたる区域）での分布状況を把握した。図3～7にそれを示す。○が全村落を、そのうち●がそれぞれの類型に属する村落を表している。以下、各タイプの分布の特徴を述べる。

① 境界不明確な散村(図3)：砺波平野の中央部、庄川扇状地の扇頂から扇央にかけての一带に分布する。ただし、扇端以北にはほとんど見られない。

② 境界明確な散村(図4)：全体として「境界不明確な散村」をとりまくように分布している。とくに平野南部の地域に多く見られる。

③ 塊状村(図5)：砺波平野の北部(庄川・小矢部川扇状地の以北)と、砺波平野南部の山麓に分布する。

④ 列状村(図6)：庄川・小矢部川扇状地の扇央から扇端にかけて、河川の中流域に位置している。両河川の

図1 砺波平野の村落形態の類型

図2 各類型の典型例

図3 境界不明確な散村の分布

間に立地する例もあるが、これも以前に支流が流れていた所にあたる。

⑤ 街路村(図7): 庄川右岸の段丘上、芹谷野用水に沿って分布する。

このように各タイプにはそれぞれ別個の分布域が存在する。

2-3 成立年代と村落形態の対応

つぎに、これらの分布を村落の成立年代と重ねてみる。

図8は現存する村落(小字)について、元和5年(1619)および寛文10年(1670)で分けた古村と新村の分布状況を示したものである⁴⁾。これを見ると元和5年(1619)の時点ですでにほぼ平野全域にわたって村落が存在していたことがわかる。こうした村落の中には、現在「散居」となっているものも多く含まれている。

一方、近世初期以降に成立した村落は、平野の各部にまとまった分布域をもつ。

図4 境界明確な散村の分布

図5 塊状村の分布

図6 列状村の分布

図7 街路村の分布

図8 古村と新村の分布(佐伯・新藤⁴⁾をもとに作成)

一つは庄川東岸の段丘上である。これらは寛文3年(1663)に開削された芹谷野用水に沿った村々である⁵⁾。そして、ここは「街路村」が多くみられる地域に対応する。

つぎに、平野南部にも新村の多く分布する地域がある。これも寛文11年(1671)に山田野用水が開削され、拓かれた地域である⁶⁾。これは「境界明確な散村」が多くみられる地域に対応する。

さらに、平野中央部(福野・砺波付近)および平野北部(小矢部川沿い)にも新村がまとまって分布する。これらは松川除⁷⁾がつくられ、庄川の流路が確定したことにより開発可能となった地域である。平野中央部は典型的な散居の地帯であり、平野北部は散村とともに「列状村」が分布する地域である。

このように、同じ新村であっても地区によって異なる村落形態を示している。そして、この分析から、それは開発経緯と相関していると予想される。

3. 村落の領域構成

5つの分類のうち、「境界不明確な散村」「境界明確な散村」「列状村」「街路村」について、その代表的な事例を1つずつとりあげ、それぞれの村落空間構成を具体的に分析する。まず、水路やミチなどの基本的な空間構成と本家・分家関係などの社会関係との対応を把握する。つぎに各戸の土地所有を把握し、その集合体である村落全体の領域構成をモデル化して示す。

なお、事例としては「境界不明確な散村」として庄川

町<天正>、「境界明確な散村」として井口村<久保>、「列状村」として砺波市<東開発(ひがしかいほつ)>、「街路村」として砺波市<増山>をとりあげた。

<天正>は、庄川扇状地の扇頂に位置する典型的な散居型村落である。大正2年(1913)に6か村の飛び地を統合して新たな行政単位として成立した⁸⁾。村内の班は開発時の単位である小字におおむね重なり、その形は南北に細長く、中央に用水路が軸のように通っている。これは開発が用水路を単位として展開していったことを示すものである(図9参照)。

<久保>は、平野東南部の山麓に近い北側斜面に位置する。元和5年(1614)の史料に記載がみられる古村であるが、屋敷は近世を通じて徐々に増加したと考えられる。東側に干谷川、西側に赤祖父川、北側に山見八ヶ用水が流れ、隣村との境界をなしている。村の形は南北にやや長く、中央付近に屋敷が分布し、その周囲を耕地がとりまいている(図10参照)。

<東開発>は、庄川の中流西岸に位置する。史料から近世初頭にすでにその存在が確認される。しかし、集落がこのような列状を形作るのは、庄川的主流路が現在の位置に確定された18世紀以降と考えられる。村落領域は、川沿いの耕地を大きく含んで構成される(図11参照)。

<増山>は、庄川中流東岸の段丘上に位置し、大正2年(1913)ごろ「増山村」と「増山新村」を併せて成立した。「増山村」はもともと中世の城下町であったが、寛文4年(1664)に「増山新村」が村立てされると、移住が行われて屋敷がなくなった⁹⁾。村落領域の中央に屋敷がまとまり、周囲を耕地がとりまいている。そして、屋敷の並びの間を芹谷野用水が縦断している(図12参照)。

3-1 水系からみた構成

図9～12は、<天正>・<久保>・<東開発>・<増山>における耕地整理以前の屋敷と水路の位置を示したものである。

<天正>(3班)(図9): 地下水位が低い井戸をもたず、地表水を生活飲料用としていた。ただし、用水から直接水を取るのではなく、いったん水路によって屋敷内のホリ(貯水池)に引き込み、利用に供している。図9では、9と7、6と2の屋敷が一つの水路によりつながっているが、9→7、6→2は本家・分家関係になっている。このように一つの水系が一つの本家・分家関係の単位に対応し、水路のカミに本家、シモに分家が位置する場合が多い。

<久保>(図10): 赤祖父川・干谷川・三清用水・森清用水の4つの水系の上に屋敷が並んでいる。多くは<天正>と同様に、水路の水を飲料用にも利用しており、屋敷の中にホリをもっていた。また、17→18、31→32は本家・分家関係となっており、この関係が同一水系上に広がっていることがわかる。

散村に属するこの2村を比較すると、どちらも屋敷を束ねるように水路が流れ、その水系をいくつか集めるかたちで村落が構成されている。さらに、水系に沿って本家・分家関係が展開するという点も共通する。

列状村<東開発>(図11): 三番堤を境として屋敷地側(ウチダ)と川側水田地帯(カワラダ)とが明確に区分され、水系も別々である。屋敷地の水系は3つに分岐し、マエスジ・ナカスジ・セドスジと呼ばれる屋敷の列に沿って流れる。また、屋敷の中に洗い場を設け、水路を利用する点も散村と共通する。ただし、本家分家関係は同一水系にまとまっていない。

街路村<増山>(図12): 各戸はホリを設けて、水路を利用して。用水の両側に並ぶ屋敷を束ねるように水路が流れ、そこから周囲の耕地へ水路が延びている。つ

まり、水系はすべて芹谷野用水から派生している。また、本家・分家関係は同一水系にまとまってはいない。

以上から、どの村落形態にも共通する特徴として、屋敷を束ねる水路の集積により村落が構成される点を指摘できる。一方、水系と本家・分家関係との対応は、<天正>や<久保>といった散村だけの特徴といえる。

3-2 土地所有からみた構成

つぎに、各戸の所有地の広がり方をみることに、領域構成のパターンを考察する¹⁰⁾。

<天正>には、次のような特徴がある(図13)。a. 所有地は屋敷の周囲にまとまる。b. そのまわりは、おおむね一つの水系でまかなわれており、水路に沿って細長く広がる。c. 本家の所有地と分家の所有地は同一水系上にカミからシモへと隣接する。d. その結果、村落はこうし

図9 境界不明確な散村<天正>の屋敷と水系

図10 境界明確な散村<久保>の屋敷と水系

図11 列状村<東開発>の屋敷と水系

図12 街路村<増山>の屋敷と水系

た均質な単位で埋め尽くされている。

一方、＜久保＞には、次のような特徴がある(図14)。

a. 屋敷と連続した若干の耕地(コシメグラ)を持つが、大部分は屋敷から離れており、しかも1軒の所有地が村落全域に分散する。このパターンは、所有地の大小にかかわらず共通する。b. 分散した所有地は、一つの水系に沿っているわけではない。c. 本家・分家の所有地は、屋敷の周囲も離れたところでも隣接する傾向がある¹¹⁾。d. この結果、村落は屋敷とそれに続く耕地が連続する地帯と、屋敷のない耕地だけの地帯とに領域的に分かれる。

形態からはどちらも散村に分類される＜天正＞と＜久保＞であるが、このように土地所有を分析すると、まったく異なる土地の集積状況が見られるのである。

＜東開発＞には、次のような特徴がある(図15)。a. 屋敷付近(ウチダ)の耕地はこれに連続する屋敷によって所有されている。しかし、大部分を占める川側(カワラダ)の耕地は1筆単位で分散している。b. これは水系でも、一つにまとまっていない。c. 本家・分家の所有地は隣接しない。

＜増山＞には、次のような特徴がある(図16)。a. 屋敷と連続した耕地(ヤシキダ)と離れた耕地の両方をもつ。離れた耕地は、芹谷野用水の東西両側に広がる。b. それは一つの水系上にない。c. 本家・分家の所有地は隣接しない。

このように土地の集積状況を見ると、＜久保＞の構成は、同じ散村である＜天正＞よりも、むしろ集村の＜東開発＞や＜増山＞に近い特徴をもっている。

3-3 領域モデル

これら4つの村落の土地所有を耕地整理の前後で比較すると、次のようなことがわかる。

＜天正＞では、耕地の区画が矩形になり、所有地の広がり水路に沿った細長いものではなくなっている(図13)。そして、屋敷を中心とした周囲に連続して耕地をもつという特徴は一層強化されている。

＜久保＞では、一筆の単位の拡大とともに部分的な土地の統合は進んだものの、全体的には1軒の所有地が分散的なままで、屋敷の周囲と離れたところとの両方に耕

図13 ＜天正＞の土地所有(9→7 本家・分家関係)

図14 ＜久保＞の土地所有(17→18 本家・分家関係)

図15 ＜東開発＞の土地所有(39-46-56 本家・分家関係)

図16 ＜増山＞の土地所有(68→22 本家・分家関係)

図17 <天正><久保><東開発><増山>の領域モデル

地を持つパターンはそのまま持続されている(図14)。

<東開発>では、区画は拡大したが1筆単位で分散する特徴などはほとんど変わっていない(図15)。

<増山>でも、部分的な統合は進んだものの、耕地を用水の東西に所有する特徴は維持されている(図16)。

このように耕地整理という大きな変革を経たにもかかわらず、それぞれの土地所有パターンはいずれの場合もそのまま維持されているのである。そして、この事実は、村落ごとに独自の領域モデルが存在していることを表している(図17)。このような領域モデルの相違は、各村が開発された経緯によるところが大きいと思われる。

近世以前から成立し、明確な村の範囲内で土地の交換と集積¹⁾を繰り返してきた<久保>に対して、<天正>は近世以降、徐々に水路を延ばしながら、1軒ずつ旧河床を開発して成立したと考えられる。

また、<東開発>は河川敷をまとめて開発して成立したと考えられるが、その独特な土地所有形態の要因の一つに川沿いの耕地カワラダの不安定性が指摘できる。明治21年(1888)の地目を見ると、カワラダの約5割が「荒地」で占められている。これは、この地域が庄川の氾濫域であったことによっており、その被害が特定の家に集中しないように各家の所有地を分散したものと考えられる。そして、このような立地特性は、他の列状村にも共通するものである。

さらに、<増山>は芹谷野用水の開削後、比較的短期間のうちに親村からの移住が行われて成立した。各屋敷が用水の両側に耕地をもつという特徴は、唯一の水源である用水に対して、条件が偏らないようにするためと考えられる。

4. まとめ

以上、平野内に形態の異なる村落があることを指摘し、これを類型化した。そして、典型例<天正><久保><東開発><増山>の分析によって、その領域構成上の特

徴を示した。とくに水系と土地所有に注目し、村落形態によらない共通原理と、形態に固有な領域モデルの存在を把握した。つまり、砺波平野における村落形態のバリエーションは、それぞれの領域モデルにより支えられているのである。そして、このモデルは村の開発経緯の違いにもとづき、その後の居住者の働きかけによってつくられたものと考えられる。

なお、村落の領域モデルは、屋敷構えや間取りといった空間構成にも密接にかかわっている。これについての分析は次稿で行うことにしたい。

参考文献および注

- 1) 地理学の分野には砺波散村についての起源論争がある。主な説として、小川琢治「越中国中部の荘宅につきて」地理雑誌、312号、1914年に示された条理制の遺構とする説、牧野信之助「旧加賀藩の散居村落について」地学雑誌、320号、1915年に示された加賀藩独自の農政の所産とする説、村松繁樹「砺波平野における散居村落について」歴史と地理28-4、1931年(村松繁樹『日本集落地理の研究』ミネルヴァ書房、1962年 所収)に示された階段状の地形、砂質土壌、地下水位の深さ、卓越風による火災延焼などの地理的条件に成立要因を求める説がある。小川の条理制遺構説に対しては、地割や道路区画の痕跡がない、東大寺墾田を砺波平野中心部と比定することはできないなどの批判がなされ、有力な反証がないままとなっている。牧野の加賀藩農政説に対しては、同じ加賀藩政下の能登・加賀に散居が見られない、加賀藩が寛永19年(1642)に実施した「田地割り制度」は、領域システムとして考えた場合に、散居の村落形態と明らかに矛盾するなどの批判がある。村松の地理的環境要因説に対しては、散居の成立要因と持続要因を混同しているという批判がある。近年では、佐伯安一「砺波平野と散村」砺波市史、pp. 494-500、1965年において、慶安4年(1651)の「お藪」が現在の地図上で点在することが示され、金田章裕「砺波散村の展開とその要因」砺波散村地域研究所研究紀要3、pp. 1-11、1986年において、13世紀には田畑が非連続的に分布し、孤立荘宅ないし小村が存在していたことが示されるなど、屋敷や耕地の点在性が藩制以前に遡ることが明らかになってきている。現在ではこれらをふまえて、砺

波平野の地理的条件と開拓事情に起源を求める説が有力視されている。

- 2) 対象地域のすべての村落は、ここで示した5分類の中に含まれる。対象地域の村落(小字)の総数は629であり、その内訳は境界不明確な散村178、境界明確な散村172、塊状村242、街路村11、列状村24となっている。
- 3) 地理学における塊状村、街路村、広場村、格子状村、散村、小村、長地条村などの用語には欧州の地理学にもとづく明確な概念規定がある。ここでの分類のうち、塊状村と街路村については、地理学と共通の用語を使うことにした。中村和夫・手塚章・石井英也「地理学講座4 地域と景観」古今書院 p. 48, 1991年、T. G. ジョーダン「ヨーロッパ文化」大明堂 pp. 301-319, 1989年ほか。
- 4) 佐伯安一・新藤正夫「砺波郡における近世新村の成立」『越中史壇』26号, pp. 26-37, 1963年8月および佐伯安一「砺波郡の近世村落一覧表」『砺波散村地域研究所研究紀要』第3号、1986年による。なお、砺波平野の新田開発は、正保(1643-)~寛文(1660-)間と天保(1830-)頃との二つの時期に集中的に進められた。新旧の境を元和5年(1619)と寛文10年(1670)としたのは、第一の開発期の前後にあたることによる。なお、旧砺波郡平野部の村数は、慶安1年(1648)から慶応3年(1868)にかけて502から630へと、128か村もの増加があった(「砺波市史」p. 479, 1965年)。
- 5) 「砺波市史」p. 457, 1965年。芹谷野用水により元禄2年(1689)

までに4400石・25村が成立した。

- 6) 「砺波市史」p. 482, 1965年
- 7) 松川除は、庄川の流れを中田川(現在の庄川)の位置に固定するために築かれた全長850間の堤防である。加賀藩により寛文10年(1670)から建設され、正徳4年(1714)に完成したとされる。寛文年間に新田開発が進んだのも、これにより千保川・新又川・中村川といった旧庄川支流の跡が開拓可能になったためといわれる。庄川町史編纂委員会「庄川町史」上巻, pp. 303-329, 1975年。
- 8) <天正>をつくった旧6村は、いずれも17世紀までに成立している。したがって<天正>の成立年代を近世前期とした。
- 9) 砺波郷土資料館編「文献史料からみた増山城とその性格」『増山城跡調査中間報告書』pp. 7-15, 1987年および「砺波市史」p. 460, 1965年による。元禄12年(1699)までの23年間に親村である増山村からの移住が終わっていたとされている。
- 10) 各土地改良区(庄川町・久保・柳瀬・梅檀野)が圃場整備事業に際して作成した「従前現形図」と「換地完成図」にもとづく。この4地区の圃場整備事業は、いずれも昭和40年代後半から昭和50年代にかけて行われた。
- 11) これは、本家が土地を分割して分家に与える際にも、屋敷の周囲と離れたところとの両方に耕地を持つパタンが保たれたことを示している。
- 12) 久保における1軒の所有地の分散は、加賀藩の「田地割り制度」に起因することが予想される。

(1995年1月30日原稿受理, 1995年8月2日採用決定)